

江戸期の滑稽俳諧（二）

伊藤浩睦

松永貞徳によって始められた漢語や俗語を入れても良い俳諧連歌は、付け筋での笑いと、連歌の式目を用いるという教養主義の二本立てで大いに流行りました。しかし、同じことをやっている、人は次第に飽きてきます。更に、そこに、貞徳が活動の拠点としていた京都と、大坂との間に経済力の逆転という現象が起きます。

江戸初期には、江戸はまだ開発途上でした。京都が日本一富裕な町でしたが、大坂の陣で丸焼けになったことが一つの転機となり、徳川家の直轄地になった大坂が日本の経済の中心地となります。

その大坂で談林俳諧が起こります。創始者は西山宗因と言われていますが、この人はこの時の大坂が持つ時代の気分には神輿として担ぎ上げられた要素が強く、そのうち本人が俳諧の変化に付いて行けなくなって、俳諧師を廃業して連歌師に戻ってしまいます。

談林俳諧の特徴は、猥雑なまでの何でも試してみる精神であり、笑いを求めるに留まらず意表を突いた趣向で読み手を驚かせるところにありました。貞徳がこだわった連歌の式目は余り重要視せず、奇矯な言葉や表現を好んで用い、「謡曲や漢文の一節の放り込み」や、「抜け」や「季語の投げ込み」といった手法も用いられました。

「抜け」は、主題になる言葉をわざと用いず、その周辺のものを使うことで読み手に分からせる手法であり、「季語の投げ込み」は、十五文字で好きなことを言い、それとは無関係に最後に春などの季語を入れるやり方です。季語を用いる時には季語が中心に来るように詠む従来の作り方からすると、革新的と言えます。そうなのですが、無茶なやり方でもありました。そのために、貞門の人達からは、「飛び体の俳諧」とか、「宗因の阿蘭陀流」といった非難も出ました。

付け筋も貞門のように前の句の言葉からの連想ではなく、心付けと言って、詠み手の気分で前の句に付いていれば良いとされました。

当初は、流行の唄や謡曲の言葉の一部を入れることで、ああそれは知っているという共感の笑いを取っていましたが、それらのタネが尽きると漢籍をネタにするようになります。この場合には漢学者という権威を卑俗に落とすことによる笑いになります。

松尾桃青と名乗って談林派の宗匠をやっていた頃の芭蕉の句に、「於春々大哉春と云々」というものがあります。これで「ああはるはるおおいなるかなはるとうんぬん」と読みますが、「孔子、孔子、大、哉孔子」という「孔子讚」をもじり、漢学者が解説書に云々と書くことを茶化しています。孔子や漢学者という権威の卑俗化です。

その一方で、何でも試してみる精神の大坂談林は、大矢数俳諧をやり始めます。内容や質は無視して、一昼夜に何句読んだかを競うもので、千六百句、三千句、四千句と増やして行き、ついに井原西鶴が二万三千五百句を作りますが、そのあたりで談林俳諧は行き詰まり、タネ切れがはっきりしてきます。そして、談林派を抜け、庶民の風雅を目指して蕉風を確立した松尾芭蕉に俳諧の主流を奪われるのです。